

# 峠を越えての文化の交流

松島 榮治（群馬県文化財保護審議会会長）

## I. はじめに

今日の話をもっと深く御理解頂くために、自己紹介的なこととお話し致します。

私は群馬県におりまして、特に、考古学や古代史を研究しておりました。ところが、一寸したきっかけで、天明3年浅間山の噴火で埋没した鎌原村の発掘を担当することになりました。担当するにあたり、考古学という学問は、記録や確かな言い伝えのない古い時代を研究する学問とされている。ところで鎌原村の場合は、江戸時代のことであり、記録や言い伝えも沢山ある。したがって、今さら考古学的な発掘調査によって、鎌原村を解明する必要はないのではないかということでした。しかし、よく考えてみますと、記録や言い伝えにない事実を、考古学的な発掘調査によって明らかにすることもできるのではないかということでした。このようなことで、私は昭和54年から鎌原村の発掘調査を担当することになりました。私の鎌原村の発掘調査で、特に皆さんにお話したいことは、観音堂の石段の調査です。観音堂は、鎌原村の中で一段と高い所にありましたので、災害の際、只一つ埋まらずに残った建物でした。高い所にありましたので石段が必要でしたが、その石段は、私が発掘調査するまでは、120段或いは150段とされ、その上部15段ほどを残して全部埋まってしまったと言われていました。ところで、こうしたことについて私は疑問を感じました。その理由は、石段の幅がせいぜい1m20cm位しかない。この幅で120あるいは150段の石段を造ることは構造的に不可能ではないかということでした。疑問に思っているだけでは、真実は解明されない。そこで、私はまず観音堂の石段の発掘調査を実施することにしました。調査を進めると、現在の地表から6mほど掘り下げたところ、一番下の石段が出てまいりました。そのことにより石段は50段であることが分かり、120段あるいは150段と言う事は単なる言い伝えであることが判明しました。このように石段の数が50段となったことは、何を意味するか、それは単に数が少なくなったということではない。それによって災害の規模が明らかとなったと言うことでその意義は大きい。

観音堂の石段の調査は、それだけでは済まず、思いもかけないことが起こりました。それは、上から49段、下から2段目の所から、毛がまとまって出てきました。私はそれを即座に人の頭髮と判断しました。以後、丁寧に発掘を進めますと顔が現れてきました。その顔は何と白骨化してなく、皮膚や肉のようなものがへばりついていて、ミイラ状態でした。したがって、その顔をじっと見ると、何か悲しそうな表情をしていました。それはそれとして困ったことが起こってきました。それはとても嫌な匂いがすることでした。今まで私が経験した事の無い匂いでした。このため、発掘調査の目的は既に達しているのだから、土を戻して調査を終了させようと思いましたが、それは研究者には許されないこととして、私は遺体を発掘し収容してあげようと思直しました。朝早くから発掘に取りかかりました。小指の先の1cmにも満たない小さな遺骨まで見逃しませんでした。こうして、発掘調査を進めていくと、遺体は1人ではなく2人であることが分かりました。その状況は、最初に見つかった人の胸の辺りにもう一つの頭があり、二人の体の重なり方、そして手足の状態などから、二人は背負われている人と背負っている人と判断しました。今、高等学校のある日本史の教科書にこの写真が掲載され、「背負っている人、背負われている人」のコメントが付けられ

ていますが、それは実は私の見解なのです。また、この二人の性別と年齢について、私は髪の毛の結い方から、背負われている人は60歳くらいの女性、背負っている人は40歳前後の女性と判断しました。それは、背負われていた人は、“茶筌結い”とされる髪型で、これは当時は歳をとった女性の髪型であり、これに対し背負っていた人の髪型は、“ジレッタ結い”とされるもので、これは若い主婦たちの結い方であったことによるものでした。これらのことにより、観音堂の石段の下部で石段に張り付くような形で発見された二人は、40歳前後の若い主婦が、60歳くらいの歳をとった女性を背負って倒れている姿と判断されたのです。災害の際の緊迫した様子が窺はれるのです。

ところで、最近その写真が、学校教育の中で“いのち・いきる”などの教材として利用されています。それは、もし若い女性は老婆を背負はないで、観音堂に走ったとすれば、距離・時間からして十分に助かったと思われれます。しかし、老婆を背負って走ったがため遅くなり“土石なだれ”に巻き込まれたものと考えられます。そこで改めて老婆の姿・形をみると、腰がすっかり曲がっていて杖を使わなければとても歩けないような姿勢です。余命もあまりないのでは。多分、家庭のこともあまり出来ず、また、村のためにならなかったのではないかと。今の言葉で言えば弱い立場にある人ではないでしょうか。こうした、弱い立場にある人を若い主婦は、見捨てることができなかつたのではないのでしょうか。今この世の中を見ますと、子が親を、親が子を、あるいは家族同志で殺しあうようなことが、毎日のようにテレビやラジオで放送されています。いのちとは何か、生きるとはどのようなことかが、今ほど問われている時はないのではないのでしょうか。そのような時に、この姿は尊いものであり、示唆に富むものと思われれます。

このようなことを含めて、私は、天明3年浅間山の噴火によって埋没した鎌原村の発掘調査に平成3年まで従事し、嬭恋村の郷土資料館の館長を勤めましたが、一昨年の3月に辞めました。資料館の館長をしている間、私は嬭恋村は今後どのようにしたらよいかとの観点に立って、「嬭恋村風土博物館構想」の立案に関わりました。これは、村全体を博物館にしようとする構想でした。しかし、残念ながら実現しませんでした。

もう一つ、させていただいたことに、「広報“つまごい”」の中に8年8ヶ月にわたって、〈嬭恋村の自然と文化〉と題して連載・執筆を致しました。そうした活動をさせて頂く中で思ったことは、嬭恋村には潜在的に“僻地史観”とでも言えるものがあるのではないかと言うことでした。群馬県の西の外れ、しかも山奥・山間、そして寒さの厳しい所とする観方は、歴史や文化にあまり関わりのない所とする史観です。あまり研究の進まない段階では、それはそれで仕方ないのですが、そんな段階では、“僻地史観”の裏側とでも言える現象がありました。それは、事実でもないことを、あたかも存在したかのように吹聴していたことです。例えば、日本武尊の故事に因むとか、源頼朝が巻狩に訪れたとか、歴史的に存在しないこと、あるいは問題視されていることをとりあげて村の誇りとするようなことです。私はこれではいけない、もっとしっかり歴史的事実を究明しなければと思ひ、私なりの地域的な歴史研究を進めてまいりました。その結果、嬭恋村にも古くからの豊かな人間生活があり、自然を相手に盛んな活動を展開してきたことが分かってきました。そのような折りに江川さんから、今日の会話を伺いました。聞けば、軽井沢サクラソウ会議の皆さんも私と同じような考えをもっているなど感じました。そこで、皆さんの前でお話することを引き受けた次第です。お引受はしたものの、何をお話したらよいか迷いました。嬭恋村だけの話では軽井沢の方々に満足頂けないだろう。軽井沢町と嬭恋村との関係について話したらよいのではないかと、言うことで、「峠を越えての文化の交流」と言う今日の題目になりました。しかし、峠を越えての文化の交流

も長い歴史があるわけです。今日お話するような縄文時代の文化的交流もあるし、中世の浅間山の信仰を中心とした交流もあったし、江戸時代にあっても盛んな文化的交流があります。それらについて、一度にお話するには時間が不足ですし、内容が薄くなってしまいます。そこで、今回は縄文時代についてお話させていただきます。

## II. 茂 沢 南 石 堂 遺 跡 の 敷 石 住 居 跡

### 1. 軽井沢の縄文遺跡

最初に、事務局で用意していただきました資料を見ていただきますと、茂沢の南石堂遺跡の敷石住居跡があります。これは、ご承知のように軽井沢にある敷石住居跡なのですが、これについてお話する前に軽井沢の縄文遺跡について触れさせていただきます。まず、申しあげたいのは、軽井沢は気温の低い所だから、縄文時代にはあまり人は住んでいなかったと思う方もいるかも知れませんが、決してそうではありません。資料-1をご覧ください。北側に浅間山があります。その南麓斜面には斜線が引いてありますが、そこは原生林で、われわれが調査しようとしてもできない場所です。その下位標高 800m から 900m くらいに軽井沢、御代田あるいは小諸や佐久の地域が入ってくるわけですが、このように縄文時代の遺跡が散在しています。これをみると、決して浅間山の南側軽井沢地域に縄文時代の人々が住んでいなかったと言うことはなく、縄文時代の人々がここに生活していたことは明らかです。こうした中で、特に注目していただきたいものに茂沢南石堂遺跡があります。その第3地点の5号遺跡、これは昭和39年に調査されたものですが、その中に敷石住居跡があります。資料-2はその写真です。右上の写真は住居跡の中の囲炉裏で、周りを石で囲み、中は窪み、土器が据えられています。これを中心にして板状の安山岩、俗に鉄平石と呼んでいますが、これを敷きつめています。茂沢の第3地点の住居跡はただの住居跡ではなく 床に石を敷詰めた敷石住居跡です。

### 2. 佐久地域の敷石住居跡

資料-3は、佐久地域の敷石住居跡です。このように佐久地域には、縄文時代の後期初頭とみられる今からおおよそ 3,500 年前の敷石住居があるのですが、ここで注意していただきたいのは、江戸時代に使われた柄のついた鏡の形に似ている柄鏡式と、そうでない柄のない方形あるいは円形に近いものがあることです。そして、分布図をみていただきますと、柄鏡式の敷石住居跡は、佐久地域の南寄りの佐久や小諸に多く、柄のない敷石住居跡はどちらかといえば、より浅間山に寄った軽井沢や御代田方面に目立つことです。なお、群馬県でも柄鏡式とそうでない敷石住居跡がありますが、軽井沢と峠をもって境する浅間山の北麓、嬭恋村では軽井沢の茂沢南石堂遺跡第3地点5号遺構にみられる柄鏡式でない敷石住居跡があります。これについては後で触れる事にします。

### 3. 茂沢南石堂遺跡第3地点5号遺構

資料-3の右下の図を見ていただきます。茂沢の南石堂遺跡第3地点5号遺構です。左側に石敷のない部分がありますが、この部分は、多分石が抜けてしまった所で、本来は板石が敷かれていた部分です。したがって、この5号遺構は囲炉裏を中心にして、床面は全体的に石敷がなされていた筈で、その全体的な形は、ほぼ完全な状態である右側（西側）を、南北中心線を基準にして、左側に折り返したような形と想像されます。この形と大きさについて、嬭恋村で発見された東平遺跡の

敷石住居跡との関連で後に言及したいと思います。

### Ⅲ. 嬭恋村東平遺跡の敷石住居跡

#### 1. 調査と結果

峠を越えたその向こうに嬭恋村があります。その嬭恋村の中に今井という区があります。今井区は、嬭恋村の中でも東端に位置し長野原町に隣接しています。その今井区に東平と呼ばれる区域があり、そこは遺跡地として周知されていました。その東平に広域農道が建設されることとなり、これを契機に平成5年から12年まで発掘調査が実施され、私はその発掘調査を担当いたしました。この東平遺跡の平成12年(第8次)の発掘調査の折りに、非常に遺存状態のよい敷石住居跡が発見されました。資料-4はその写真と実測図です。

#### 2. 敷石住居跡の形と大きさ

資料-4の写真と実測図をみていただきますと、この住居跡の大体の様子と形や大きさなどお分かりいただけると思います。写真の真ん中の黒く写っているのが囲炉裏です。囲炉裏は石囲で方形に囲まれその中には土器が据えられています。囲炉裏を中心にして床面は、全部板状の安山岩(鉄平石)で、現在の家屋のテラスや玄関の床面のように敷き詰められています。その床面の平面形を実測図で確かめていただきますと、石敷の縁辺には屈折する部分があり、その屈折する部分には柱穴痕が確認されています。右下の屈折する部分にNo.1の柱穴痕があり、それより、時計回りにNo.2、No.3、No.4、No.5、No.6があります。したがって、この敷石住居跡の上屋構造は六角形となります。次に住居跡の大きさについて資料-5でみていただきますと、柱穴痕の芯々で計測しますと、柱の間隔、No.1~No.2の間が220cm、No.2~No.3が212cm、No.3~No.4が215cm、No.4~No.5が215cm、No.5~No.6が234cm、No.6~No.1が170cmとなります。これをみると、No.5~No.6とNo.6~No.1が他の部分と違っています。これは、No.6~No.1はこの家の出入口となっています。そのため、他の部分より狭くなり、その分No.5~No.6が広がったとみられます。いずれにしろ、こうして柱穴痕の間隔を計測すると、平均間隔は211cmとなります。なお、No.5~No.6の間にはもう一つ柱穴痕があります。このようなことを考えますと、この敷石住居跡は、その基本形は六角形であり、その柱間の幅は211cm前後であったと推定されます。

#### 3. 時代とその背景

東平遺跡の敷石住居跡は、六角形を呈し、しかも企画的な住居跡でした。ところでこれが造られたの何時ごろのことなのか。住居跡の真ん中には囲炉裏があり、その中には甕形の土器が据えられていました。その土器は、縄文時代後期初頭の土器であることから、この住居跡が造られ使用されていたのは、今から3,500年ほど前であることが分かりました。

縄文時代の住居は、竪穴住居跡が一般的で、その床面の形は不整形に始まり、前期になると方形となり、後・晩期になると円形や方形になるとされています。こうした推移の中で、中期末から後期初頭にかけて何故か敷石住居が出現します。このような敷石住居跡は、関東平野南部を中心に関東平野の北部、中部地方の東部そして福島県方面に分布すると言われています。長野県の佐久地域については、前に資料-3でみたとおりですが、群馬県でも、かなりの数の敷石住居跡が発見され調査されており、その内5件が群馬県指定史跡となっています。こうした中で、東平敷石住居は、

これまで発見され調査されたものに比べて優るとも劣らない貴重なもので、その存在意義は大きいとされています。

#### IV. 東平敷石住居についての考察

##### 1. 床面の設計と施工について

住居跡の平面形はほぼ六角形です。これは驚きです。今からおよそ 3,500 年前とされる縄文時代後期には、現在のように数学とされるものは発達していない。したがって幾何学的知識はない。もちろん、コンパスもないし分度器もない。また、六角形とされる概念もなかった筈です。そんな時代に何を考えどのようにして六角形を造りだしたのだろうか。発見された日、私は作業時間を早くきりあげ、調査に参加した村の人達に問題を提起し、宿題として明朝までに考えていただくようお願いいたしました。しかし、決定的な回答は得られませんでした。その後もいろいろ考えてみましたが、現時点での結論は、長さ 211cm ほどの棒を用意し、その棒の一端を固定してぐるりと円を描き、その円周を使用した棒で割っていったのではないかと言うことです。数学的な知識は無くとも六角形を描く、それは“知恵”とされるものだと思います。

また、六角形の床面は、東西南北どの方向でもほぼ水平となっていました。過日、我が家では、庭にコンクリートブロックを使用して花壇を作ろうとした際、ブロックが水平に設置できず苦労したことがありました。ところが、この敷石住居跡の場合、どの面もほぼ水平なのです。水準器や測量器具の無かったこの時代に、どのようにして水平を導きだしたのか、これも問題です。建物を造る際、土台が平らでないと困ります。この点、この住居跡を造った人達はちゃんとそれを意識していたようです。それでは、一体どのようにして水平を導きだしたのでしょうか。これについても検討してみました。水を利用したのではないかと考えましたが、具体的な方法は思い当たりませんでした。いろいろ考えた結果、形を造る時に使用した棒などを横にして1本の指で支え、左右のバランスがとれた時が水平であることに気づきました。これを基準にすれば簡単に水平が導きだせます。果してこのような方法がとられていたかどうか。それは分かりませんが、知識を抜きにして知恵によって生活は成り立つものと思いました。

##### 2. 敷石の量について

板状の安山岩を敷き詰めた床面積は、計測の結果約 12.5m<sup>2</sup>で、畳に換算すると 8 畳弱となります。それぞれの石の厚さは保存を前提にしているため計測はできませんでしたが、一部目視できる部分でみると 5cm 前後と推定されます。このことによって、使われていた石の重量を計算しますと、実に 1.3t になります。しかし、これだけでは済みません。石を敷く際に隙間を無くすため形を整えています。したがって、実際にこの住居の床に石敷をするためには、最少 1.5t の石を使用していたと推定されます。

##### 3. 石材の供給について、

石敷に使用された板状の安山岩鉄平石は、近くを流れている吾妻川やその支流の今井川から無差別に拾い集めたものではありません。同一の石を選んで使用しています。そこで、使用されている石を何処から採ってきたか検討してみました。現在のところ、遺跡地の周辺嬬恋村や長野原町で、同様の石を産出する場所は 5 カ所ほど確認されています。この内、目視的にもっとも類似している

石を産出する所は、遺跡地から直線距離にして約 6km ほど離れた、干俣区の仁田沢のキッカケ橋と言う所です。したがって、仮にキッカケ橋を使用した石材の供給地とすると、その地から遺跡地までは、山あり川あり、また迂回しなければならない所もあるわけですから、実際には最短でも約 10km の距離となり、その約 10km の距離を約 1.5t もの石材を運んだものと考えられます。

#### 4. 敷石床面の数値的検討について

すでに資料-5 にみられますように、この敷石住居跡は非常に企画的です。柱穴の平均間隔は 2.11m で、その差渡幅はその 2 倍の 4.2m です。そこで、この数値について留意すると、あの有名な青森県の三内丸山遺跡の掘建柱の建築遺構では、2.8m とか 4.2m という数値が盛んに使用されていますが、これについて研究者の中には、35cm を一単位とする基準尺度があったのではと主張し、これを“縄文尺”と呼んでいます。ところで、東平の敷石住居跡は、柱穴の平均間隔は 2.11m で、35cm のほぼ 6 倍となり、最大幅の 4.2m は 35cm の 12 倍となります。こうしたことを考えると、この敷石住居を造るにあたって、三内丸山遺跡と同様基準尺度すなわち縄文尺が使われていたのではないかと思われま

## V. 関 連 参 考 事 項

### 1. 黒色磨研注口土器について

ここで東平遺跡の敷石住居とは直接関係ないのですが、関連することとして黒色磨研注口土器について紹介したいと思います。この土器は、平成 5 年の第 1 次調査の折りに、敷石住居跡から 40m 程離れた配石遺構とされ埋葬施設から発見されました。資料-6 をみていただきたいと思います。黒い色をしており、表面は磨かれ、注ぎ口が付けられているので黒色磨研注口土器と呼んでいます。大小セットで、しかも殆ど無傷で出土し、加えて特徴的な文様が施されているので、現在、群馬県の重要文化財に指定されています。実はこの土器は、すでに国外では、フランス・韓国・マレーシアの博物館で、国内では国立博物館などに出品され紹介されています。この土器の原始美術品としてあるいは歴史資料として重要性を物語っています。ところで、この二つの土器は、これまであまり重要視あるいは問題視されなかった面を内に秘めています。ご紹介したいと思います。

### 2. 大きさと形 (数値的検討)

資料-7 の実測図をご覧ください。先ず高さですが、小さい方は 16cm 大きい方は 23.4cm です。この数値は、小さい方を 1 とした場合、大きい方はその 1.4 倍です。また、それぞれの土器の高さと幅の比は、幅 1 に対して高さはその 1.4 倍なのです。すなわちこの二つの土器は 1 対 1.4 の造形なのです。ところで 1.4 という数値は $\sqrt{2}$ ですから、この二つの土器は 1 対 $\sqrt{2}$ の造形と言い替えることもできます。私がこのようなことを言いますと、多くの人達は、3,500 年前の人が小数点以下の数値にこだわることもなかったし、まして $\sqrt{2}$ などを意識する筈はないから、私の言うことは言い過ぎだと批判します。しかし、私は数学的なことをいっているのではなく、感覚的なことと主張してきました。それと言うのも、私達はそれとは気付かず、毎日毎日 1 対 $\sqrt{2}$ の形をしたものに接したり、あるいは利用したりしているのです。それは、用紙のサイズです。用紙のサイズには A4 とか B5 とかありますが、これら全て用紙の縦とて横の比は、1 対 $\sqrt{2}$ なのです。試してみましょう。これは A4 とされる用紙です。短辺 (横) と同じ長さを長辺 (縦) にとり、正方形をつくりま

この正方形の対角線の長さは 長辺（縦）の長さに一致します。すなわち、 $1\sqrt{2}$  なのです。このように私達は日常的に  $1\sqrt{2}$  の形に接しているのです。しかし、それに気付いていないと言うことです。用紙類だけではありません。以前、大工さんは曲尺とよばれる金属製のL字形の物差しを所有し使用していましたが、その曲尺とされる物差しの表裏には、刻み目が施されていましたが、その表裏の刻み目は何と  $1\sqrt{2}$  となっていました。したがって、大工さんは  $1\sqrt{2}$  という数学的理論を知らなくとも、簡単に窓枠などに  $1\sqrt{2}$  の形を作り出していたのです。もっと考えてみますと、私達の家の間取りには六畳間とされるものがありますが、それは、縦横の比はほぼ  $1\sqrt{2}$  なのです。このように考えてみますと、私達の感覚は 3,500 年前の縄文時代の人と同じ感覚の持ち主だったと言うことになります。いや、私達は 3,500 年前の縄文時代の人々の感覚を今日に引きずっていると言うことでしょうか。いずれにしろ、敷石住居跡のある東平遺跡では、非常に文化の程度の高い縄文時代文化が、展開していたと言うことが考えられます。

## VI. 再び 茂 沢 南 石 堂 の 敷 石 住 居 跡 に つ い て

### 1. 住居の形と大きさについて

これまで孺恋村で発見された東平の敷石住居跡と、それと間接的に関連するとみられる黒色磨研注口土器について触れてきましたが、ここで、茂沢南石堂の敷石住居跡と、孺恋村東平の敷石住居跡との関連性について触れてみたいと思います。資料-8 をご覧いただきたいと思います。住居跡の実測図です。左側が茂沢南石堂の敷石住居跡で、右側が東平の敷石住居跡です。茂沢南石堂の敷石住居跡は、昭和 39 年の発掘調査です。したがって、当時の状況などから柱穴跡の確認などはしていません。このため、住居の形ははっきりしていません。調査者は、調査報告書の中で方形ないし円形としていますが、残存する敷石の北および東側の縁辺部をよくみると、直線的な線が認められます。このため直線部分の両端、屈折部分に仮に柱穴を想定すると、この住居跡は多角形となります。そして、屈折の角度を勘案すると六角形が想定されます。そこで、六角形として外縁を描き、東平の敷石住居跡と比較してみると、両者の平面形は比較的良好に似ていることに気付きます。また、その大きさですが、調査者は、南北が 4.1m、東西は 4.4m としています。この数値を平均しますと 4.25m となります。これは、前に述べました東平の敷石住居跡の差渡しの平均的な長さ 4.20m に極めて近似しています。軽井沢の茂沢南石堂の敷石住居跡は、その形大きさが孺恋の東平の敷石住居跡の形と大きさが驚くほど似ているのです。

### 2. 石材の量とその供給について

二つの住居跡は、形や大きさが似ているだけでなく、使用した石材とその量、供給その仕方も似ているのです。茂沢南石堂の住居跡の床面に使用した石材の量は、その推定面積あるいは石の厚さから、当然東平の敷石住居跡に使用した石材の量と同じ位の石材の量、約 1.5t 程が使用されたと推定されます。そして、その石材は板状の安山岩を使用していることから、決して千曲川やその支流の河原などから集めたものではなく、一定の供給地があり、そこで採取し運搬したものと考えられます。この点、調査者は、直線距離にして約 1.5km ほど離れた森泉山を想定しているようですが、私は、石の性質などから、直線距離にして約 5km ほど離れた八風山辺りで採取し、運搬したのではないかと考えています。いずれにしても、茂沢南石堂の敷石住居は、その構築にあたって、石材の選択は勿論、石材の量および供給の方法などについて、東平の敷石住居跡のそれと類似する面が多

いのです。

## VII. お わ り に

孀恋村も軽井沢町も、群馬・長野の両県の県境に位置し、しかも、標高が高く寒さも厳しく場所であり、とかく、“文化果つる地”のような認識が潜在的にあります。その結果、見るべき歴史はなかったと言うような、いわば僻地史観が見え隠れし、その歴史が正しく評価されない場合があるのではないのでしょうか。今日、私は峠を越えた向こう側、群馬の孀恋村に素晴らしい縄文時代の敷石住居跡が発見され調査され、それを支えた高い文化があったことを紹介させていただきました。そして、その孀恋村の敷石住居跡に極めて類似した敷石住居跡がこの軽井沢町にあったことに言及しました。こうした類似したものが出現したことは、その根底には敷石住居についての共通した認識と方法や技術あったものと考えられます。特に尺度は重要と思われれます。縄文尺とされるような共通した基準尺度があつて初めて可能なことと思います。

ところで、地域的に幾ら高い文化があつても、それが地域に限定され、その情報が伝わらなかつたら、周囲に影響をもたらすことは無いものと考えられます。浅間山を跨いで、その南側と北側に、今からおよそ 3,500 年前の縄文時代に、類似した質の高い文化が展開したと考えられます。その背景には両者の間に盛んな情報交換すなわち「峠を越えての文化の交流」があつたのではないのでしょうか。とかく、現在の人々は、高い山や深い川などの自然的条件や、行政区画などの社会的条件が情報交換の障害になり、文化を孤立化やその発展を阻害させていたように思い勝ちです。しかし、歴史の発展にとって、厳しいとされる自然条件も、行政区画などの社会的条件も、そこに住む人の意思によっては、さしたる障害にならなかつたのではないのでしょうか。

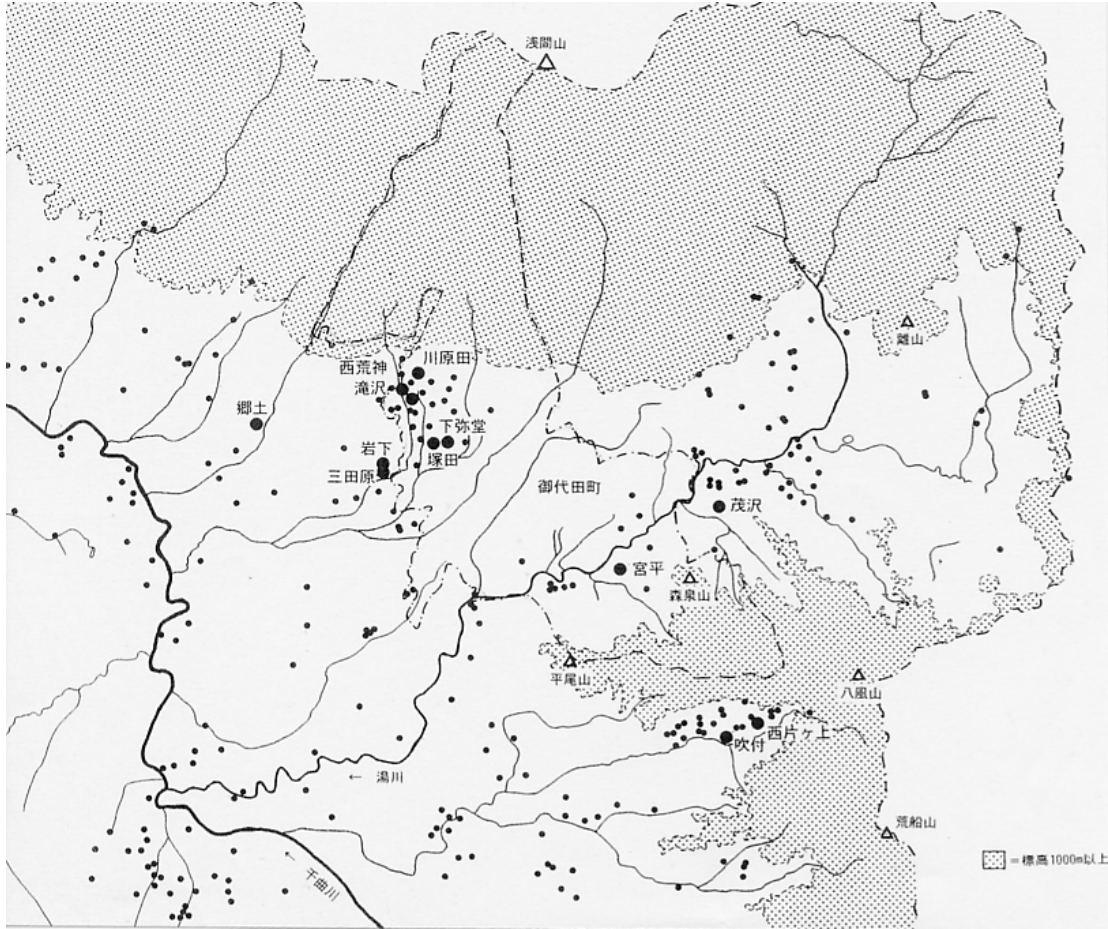
本日、「峠を越えての文化の交流」と題して、特に縄文時代の話をしていただきましたが、この際、もう一つ典型的な事実を紹介させていただきます。それは、熊野神社に関わることです。ご承知のとおり熊野神社は、軽井沢町と群馬県の松井田町との境界にあり、社殿も両者に跨がっていると聞いています。したがって、祭りも神官をはじめそこに生活する人々も一体となつていたのではないのでしょうか、文字どおり峠を越えての文化の交流があつたのではないのでしょうか。そうした中で松井田町分に鐘楼があり梵鐘があります。その鐘は、群馬では最も古い鐘（正応 5 年=1292）として現在、群馬県の重要文化財に認定されています。ところで、この鐘は、明治のはじめの神仏分離、廃仏毀釈の際、神社に鐘は不必要とのことで、潰されることになりました。その時、当時の軽井沢の人達が「あの鐘は、時を告げる鐘」と主張し、潰されることなく維持されたと聞いています。その頃の軽井沢の人達がいかに文化財を大切にされたかが窺われます。軽井沢の豊かな自然の中に、古くから軽井沢なりの誇るべき文化があつたのだと、今、改めて認識する次第です。何もかも新しい軽井沢の町に例え録音でもよい、今から 700 余年前の熊野神社の鐘の音を響かせたらいかなものなのでしょうか、

ご静聴有り難うございました。



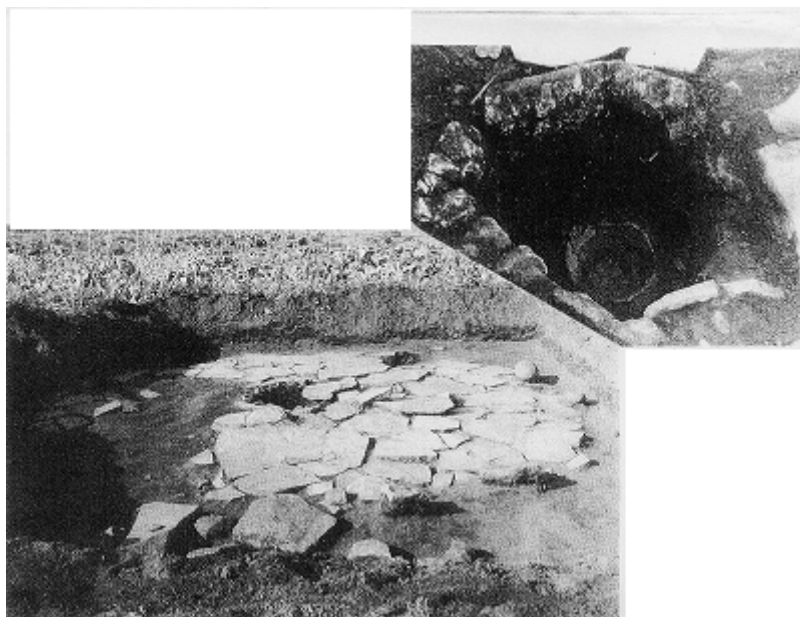
資料-1 浅間山麓周辺の縄文遺跡分布

(本橋恵美子、2000、「浅間山麓の敷石住居住居址」、『宮原遺跡』、御代田町教育委員会)



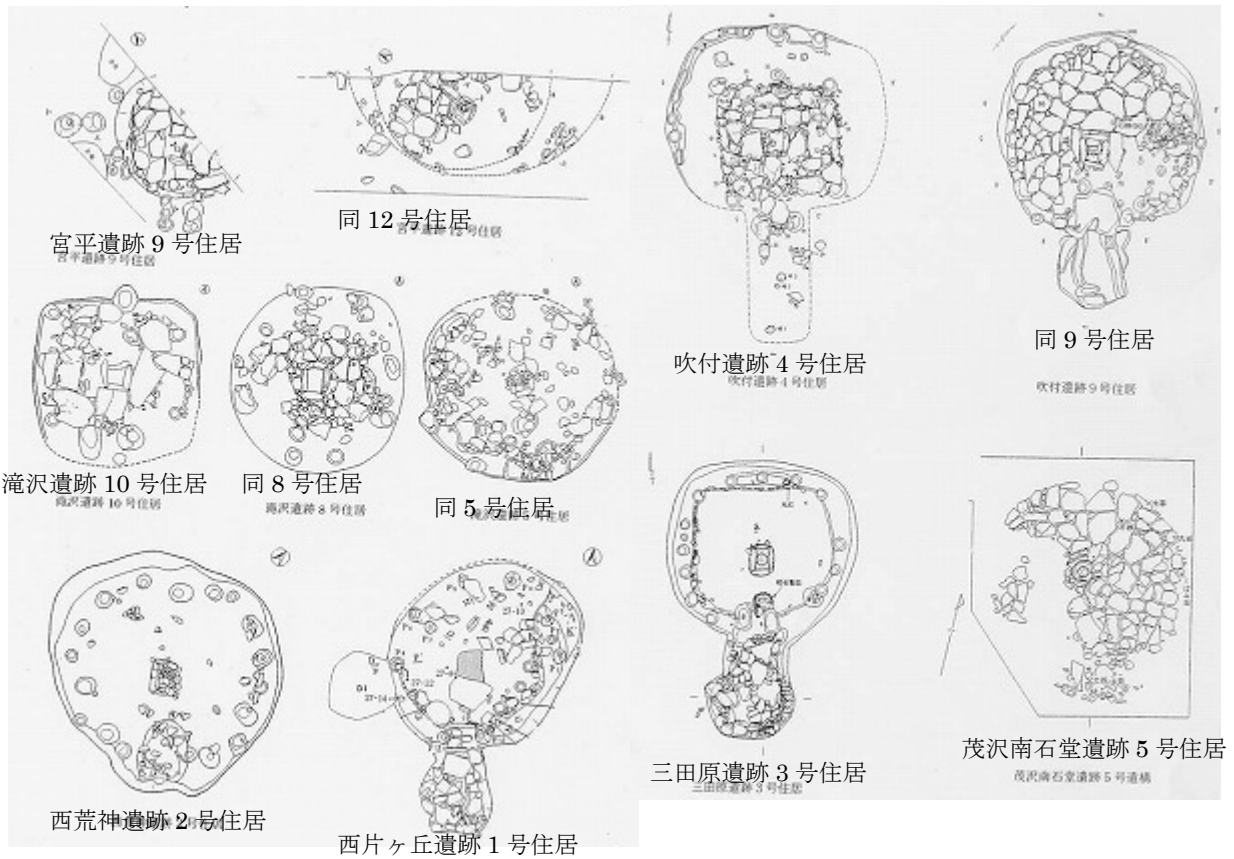
資料-2 第3地点5号遺構およびその中央の石囲い炉

(上野佳也、1983、「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」、軽井沢町教育委員会)



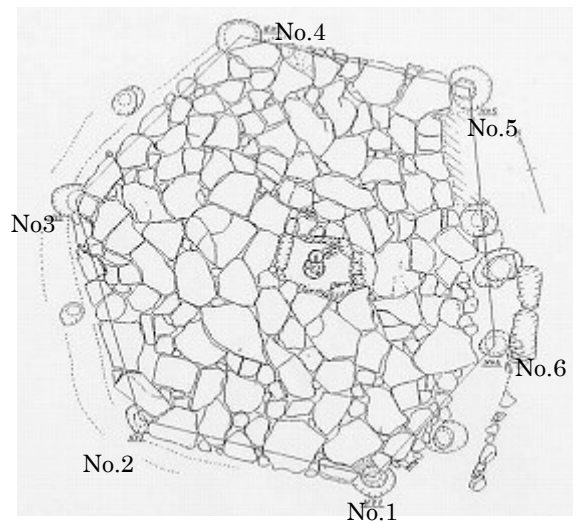
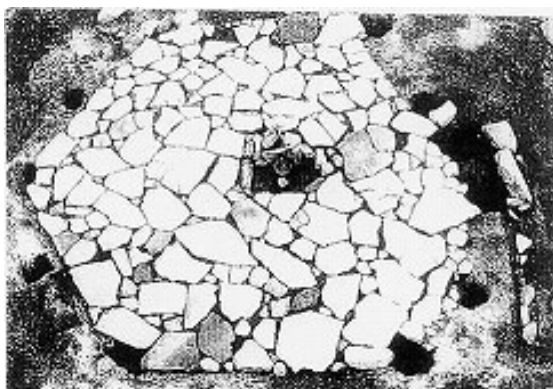
資料-3 佐久地域の敷石住居

(本橋恵美子、2000、「浅間山麓の敷石住居住居址」、『宮原遺跡』、御代田町教育委員会)



資料-4 東平敷石住居遺跡

(松島榮治、2006、「縄文人の家づくり」等、孺恋村文化財研究会)



資料-5 東平敷石住居の大きさ

(松島榮治、2006、「縄文人の家づくり」等、孀恋村文化財研究会)

①支柱穴の間隔

No.1~No.2	→	220cm	}	平均間隔 → 211cm
No.2~No.3	→	212cm		
No.3~No.4	→	215cm		
No.4~No.5	→	215cm		
No.5~No.6	→	234cm		
No.6~No.1	→	170cm		

②対角線の長さ

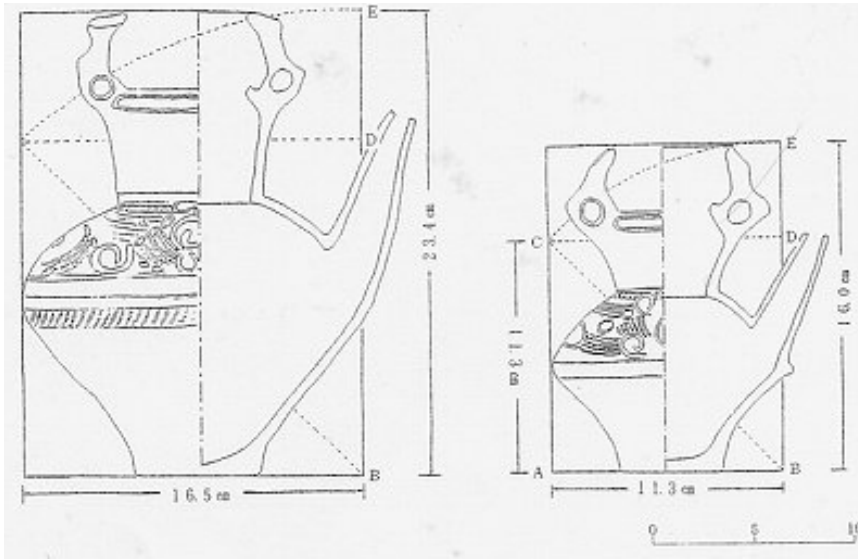
No.1~No.4	→	422cm	}	平均長 → 420cm
No.2~No.5	→	427cm		
No.3~No.6	→	212cm		

資料-6 黒色注口土器（東平遺跡出土）写真

(松島榮治、1995、『東平・立石遺跡』孀恋村教育委員会)



資料-7 黒色注口土器（東平遺跡出土）計測図  
（松島榮治、2006、「縄文人の家づくり」等、縄恋村文化財研究会）



資料-8 茂沢南石堂住居遺跡（左）と東平住居遺跡（右）の実測図比較  
（前出・松島榮治 2006、上野佳也 1983）

